

機関番号：32614
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2009～2010
 課題番号：21720028
 研究課題名（和文） 中世後期から近世初頭における吉田家の神社研究に関する基礎的研究
 研究課題名（英文） Basic Research of the Yoshida house' s study of Shinto shrines from the late medieval to the early modern era
 研究代表者
 新井 大祐（ARAI DAISUKE）
 國學院大學・研究開発推進機構・助教
 研究者番号：00445462

研究成果の概要（和文）：中世後期から近世初頭における吉田家の神社研究の根底には、南北朝期以来の『延喜式』『神名帳』という古典に対する関心及び研究活動が存在することが確認された。ただし、それらは単なる古典研究という範疇にとどまるものではなく、同家が神祇道家として諸国の神社への影響を強くしていく中で必要不可欠の営みであること、すなわち「式神名帳」とそれに基づいた神社研究が、神祇道家としての同家の確立を支えた重要な拠り所の一つであったことが理解された。

研究成果の概要（英文）：According to this research, it was confirmed that there were interests and researches on the classic “*Engisiki-Jinmyōchō*” started from the *Namboku-chō* period in the basis of Shinto shrines studies by the Yoshida house from the late medieval to the early modern era. It was also understood that these studies were not only a simple ‘classic studies’, though, these were also essential and necessity for the house to increase their influences on Shinto shrines in the whole country as *Jingidōke*. In other words, “*Engisiki-Jinmyōchō*” and Shinto shrine studies which was based on the text were important bases for the Yoshida house as *Jingidōke*.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：神道学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：神道思想史 神社・神祇 吉田神道 神社縁起 『延喜式』『神名帳』

1. 研究開始当初の背景

神道史を考える上で、吉田家及び吉田神道は決して避けて通ることはできない重要な存在である。中世期に萌芽・発展した同家及び同神道は、その後、近代を迎えるまで朝幕や諸国の神社などに多大な影響力を持ち続けたのであり、それゆえ神道研究においてもその存在は早くより注目され、先学による多

くの研究蓄積が残されている。

こうした従来吉田神道に対する研究については、1) 創唱者・吉田兼俱及びその子孫の著作とそこから看取される吉田神道の思想・教義の研究、2) 『日本書紀』を中心とした古典研究の家（「日本紀の家」）としての古典註釈や講義に関する研究、3) 「神祇長上」などと名乗り、中世後期から近世を通じて神

祇・神社を支配するに至った当時の宗教制度史に係る研究、の3つが主であった。

これら1~3の問題はそれぞれが密接不可分に関わり合うものであり、それぞれについての研究は活況を呈しているものの、反面、『二十二社註式』や『諸社根元記』『諸神記』などを代表とする吉田家における諸神社に対する研究とその成果に着目したものは多くないという状況にあった。

そのような中、代表者は、これまで中世期における神社の由緒や縁起の成立背景などから同時代の神社の有り様を探り、神道・神祇というものが中世の人々にとってどのように捉えられていたのかという、神祇信仰を中心とした中世人の思惟・思考の解明に努めてきた。とくに諸社の縁起や神祇関連言説などを集成した文献資料に着目し、その内容や出典・書承関係から看取される各種典籍の成立背景について考察を加えるとともに、それら〈言説〉と、実際の信仰の〈場〉である神社がいかなる関わりを有していたのかについて考察を行ってきた。その調査研究の過程で、従来、個別の流派に根ざすものと考えられてきた中世期の各種神祇関係言説が実際には相互に密に関連し、さらに、とりわけ大きな影響を有するものが吉田神道であることを再確認し、諸社・諸流と同家・同神道説との交渉に発する神祇説の展開という問題に関心を持つに至った。そして、このような観点から、吉田家による神祇・神社研究書として広く知られる、諸社の記録や縁起を集成した前掲『諸社根元記』や『二十二社註式』などに着目し、予備的調査を行ってきた。

そこで、代表者は、前記の従来の吉田家及び吉田神道の研究状況に鑑み、本課題においては、如上の研究蓄積をさらに深化させ、かかる吉田家において神社研究書が作成されるに至った背景、すなわち、研究の具体的材料となったと思しき、その集書に係る縁起・社記類を通して、それらを収集し得た吉田家と諸国の神社との関わりについて研究を行うこととした。

2. 研究の目的

前述の通り、従来の吉田神道研究については、吉田家当主達の思想や神道説への思想史のアプローチや、諸国神社を支配するに至らしめた中・近世期における宗教制度史的な面からのアプローチがほとんどであった。

これに対し、本研究は、そのような思想史的研究の中でも、特に神祇・神社に対する知的関心という面に特化し、具体的には諸社関係資料・神祇書の集書・集成という営為に視座を据えることによって、そこから当時の宗教的な「知のネットワーク」における吉田家の位置づけを考究するものである。このよう

な「知のネットワーク」に対する研究は、近年は中世文学研究の領域において、種々の寺院及びその付置文庫などが襲蔵するところの典籍群（聖教類）を通して、特に神仏習合思想の受容・展開の解明を主とするものが盛んである。しかし、吉田神道と、それとは成立背景や立場を異にする神祇信仰との交渉に対する研究は決して多いとは言えないのである。すなわち、吉田神道創唱者である吉田兼俱（室町時代）の言を借りるならば、その思想を具現化した主要著作『唯一神道名法要集』で冒頭に掲げられるところの、神仏習合思想に基づいて神祇を捉える「両部習合神道」と、自家の神道であり神道の正道と主張する「元本宗源神道」（吉田神道）の研究の進展は目覚ましいものの、諸社がその縁起や由緒に即して神を祀る「本迹縁起神道（社例伝記神道）」についての研究にはいまだ多くの余地が残されているのである。

以上より、代表者は、とくに吉田家が「神祇道の家」として台頭し始める中世後期から近世初頭を中心とし、同時代の同家の人びとが、自家の神道説や歴史とは異なる由緒や故実を保持する諸社にどのように相対し、また、それらをどのように理解しようとしていたのかという点、すなわち神祇信仰の実際の〈場〉である「神社」というものに対する同家の人びとの意識を解明することを根底に置き、そのための基礎的な研究として、同家による神社縁起や神社研究書等の整理と調査を進め、それらの収集や作成の背景の一端を明らかにすることを目的としている。さらに、それら同家による神社研究の営みが、現行行われている神社史研究及び神道思想史研究にいかん位置付けられ、いかなる意義を有するかという点も視野に入れながら、課題に取り組むこととした。

3. 研究の方法

本課題の目的は、吉田家が作成・収集した神祇書・神社研究書・神社関係資料の分析を通して、「神祇道の家」として台頭し始める中世後期から近世初頭における同家の諸社及び神道諸流への意識・理解の一端を解明することにある。そのため、研究方法としては、同家作成の神祇・神社研究書及びその集書に係る神社縁起・社記類等を可能な限り把握・調査し、特にその内容や出典・書承関係（伝来）等に対して検討を加えることにより、そこから看取される「知のネットワーク」を明らかにすることが主眼となる。

そこで、研究を進めるにあたっては、具体的には以下の(1)(2)の2つの調査研究を中心とした。

- (1) 中～近世社会における神祇・神社関係の知識の授受に関する調査

研究対象となる中世後期から近世初頭における吉田家及び同家との交流が認められる公家等の記録に散見する神社関係記事を調査し、それらの分析を行う。これによって、当時の人びとの神社に対する意識一般を理解するとともに、それらの知識の授受の有様から、縁起や神祇言説の流布の実態を把握することとした。

(2) 吉田家襲蔵神社関係資料の調査

(1) の調査と並行して、吉田家の収集・作成した神社関係資料の調査を進める。

具体的には、同家に伝来・襲蔵していた資料の大半を「吉田文庫」として収める天理大学附属天理図書館へおもむき、それらのうち、神社研究書及び諸社の縁起・社記類等の文献資料の調査を進めるとともに、複写等による資料の収集を進め、それらの分析を行うこととした。

4. 研究成果

(1) 記録(日記)類に見る神社・神祇関係記事の調査研究

中世後期から近世初頭における吉田家及び同家との交流が認められる公家の記録等を収集し、それらにおける神社や神祇に関する記述の調査を行った。とりわけ、織豊期における吉田家の当主であり、その後の近世における吉田神道の隆盛の基盤を築いた吉田兼見の日記『兼見卿記』、及びその実弟であり同じく吉田神道の普及に尽力した僧・梵舜の日記『舜旧記』に対しては重点的に精査を行い、諸国の神社縁起・神祇書関係記事の整理・分析を進めた。その結果、管見に触れた限りでは『兼見卿記』2件、『舜旧記』16件と、さほど該当記事は多くないことが判明した。その記事の大半は禁中をはじめとする有力者や諸国寺社への書写進上が中心となるが(例えば寛永5(1628)年8月20日条「禁中ヨリ廿二社之其国其郡鎮座記可進上之由(中略)則撰記令進上了」)、諸国の神社から縁起類が到来した事例も散見するのであり、そこから、より広く諸国神社との関係について述べた記事の抽出や「宗源宣旨」の発給記録等と、前掲の吉田文庫収蔵の諸社関連資料との関係性についての調査を進めている。

また、こうした中で特に注目すべき記事は、『実隆公記』に兼俱が二十二社に関する講釈を行っていた記事が見られることや(延徳元年(1489)~2年)、『舜旧記』寛永7(1630)年2月14日条「於浄勝院殿天神之御縁起講申了、浄雲院殿同時聴聞也」との記事などである。これにより、諸社の縁起の集書・集成といった活動のみならず、同家の人びとの活動の一つとして、神社及び神社縁起についての講釈を行っていたことが理解される。中世期の吉田家(周辺)において、『日本書紀』

などのみならず、このような、縁起を通した神社に関する講釈が行われていた点は興味深く、今後もこうした点に注意を払いつつ調査を続けることとしたい。

(2) 天理大学附属天理図書館における吉田文庫神社関係資料調査

研究を進める上での基礎的作業として天理大学附属天理図書館吉田文庫所蔵資料の目録『吉田文庫神道書目録』における諸国神社関係資料項目を整理し、各資料の成立年代や性質、書写者等による分類を試み、その性格や伝来にいたる歴史的背景などの全体像把握に努めた。以上の成果をもとに平成21年度には天理図書館において資料調査2回を実施し、同家が作成・収集した諸国神社関係資料400余点の調査を行った。

① 諸国神社の縁起等に関する調査

吉田文庫の収蔵する神道資料類を収めた『吉田文庫神道書目録』のうち、諸国の神社関係の資料をまとめた「神社」部に分類される資料中、とくに「1.諸国神社・神名帳・神階」「2.畿内神社」「3.東海・東山・北陸道神社」「4.山陽・山陰・南海・西海道神社」についての調査を進めた(特定の一社に限定した綱目である「伊勢神宮」関係及び「吉田神社」関係の資料は除いた)。

以上のうち、個別神社についてまとめられた2~4の資料中、さらに縁起や由緒等について記した資料を絞り込むと、それらは計141点にのぼる。そのうち、「畿内」の神社関係資料が全体の約5割強を占め、かつ、山城・大和両国についてはその大半にのぼる。これは、山城では、賀茂・稲荷・祇園・北野など、大和では春日・広瀬・三輪などといった二十二社に数えられる有力社に関するものが圧倒的多数を占めているためである。

ただし、中には『高砂山七野社大明神縁起』、『高松縁起付神楽作法』、『山城国大豊大明神之記』などといった、前記の二十二社を中心とする大社に比すれば規模の小さい神社の縁起類も散見し、これらは、同家と諸国の様々な神社との交渉を考える上で特に重要な資料となるものであることが理解された。

他方、畿内以外の諸国については、前述の通り畿内とほど近く、二十二社の一社である日吉社が鎮座する近江は10点となるが、それ以外の国については概ね1~3点程度となる。加えて、諸国68ヶ国のうち、畿内を含めても約半数である37ヶ国分のみが集められており、遍く諸国の神社に関する縁起・社記が作成・収集・襲蔵されていたとは言い難い。

ただし、そのような中でも、都より遠く離れた西海道が17点残され、豊前につい

ては5点、筑前が4点を数える点、同様に東山道の陸奥が5点である点などから、これらは、同家が都近隣に関わらず、諸国の神社と強い結びつきを有していたことが再確認される資料であるといえよう。

また、以上の調査では合わせて各資料の伝来にも注目したが、実際には141点のうち、3割程度の資料にしか奥書等が見受けられず、そのため確たる成立年代や襲蔵の背景を知ることが困難なものが多いことが理解された。ただし、そのような中でもとくに、同家の礎を築いた室町期～織豊期の当主・吉田兼右とその子である兼見・梵舜の手になるものが比較的多く見受けられ、そこから、同家の神社研究を考える上で、やはり兼右・兼見・梵舜の2代が同家の神社研究を考える上で重要な時期であることが再確認され、これにより(1)に示したとおり、以上の2代3名による著作等を重点的に調査する方針をとることとした。

(以上、「吉田家と神社縁起に関する一考察—天理大学附属天理図書館吉田文庫所蔵の神社縁起関係資料を中心に—」と題して、2009年12月6日開催の神道宗教学会第63回学術大会において発表)

②吉田家集成の神社研究書に関する調査研究

以上の個別の神社関係資料とは別に、諸社の縁起や社記を集成した「1.諸国神社・神名帳・神階」に分類される諸書についても調査・収集を行った。

前掲のとおり、従来、同家における神社研究の一大成果として注目を集めてきたものとして『諸社根元記』なる一書がある。

同書はこれまで吉田兼右の手になるものとされ、天理図書館をはじめ、各地に伝来しており、比較的広く知られた資料であるが、早くよりその成立についての問題が取り上げられる一方、同家の神社研究を考える上で重要な資料であるにも関わらず内容自体について詳しく述べた研究はほとんどなく、加えて、近年ではあまり研究の俎上にあがることのない状況にあった。

そこで、本研究では、同書及び同系諸本に注目し、それらの内容に分析を加えるとともに、従来の同書への研究に対して再検討を行った。

その結果、以下の点が判明した。

(イ) 同書の成立について

従来の研究では、西田長男が唱えた『諸社根元記』(以下、『根元記』という)が室町～織豊期に吉田兼右によって編まれ、内容の随所を同じくする同系本である『諸神記』や『諸神根源抄』(以下、『根源抄』という)は『根元記』の改竄本であるとする

『根元記』先行説と、『諸神記』や『根源抄』に見られる神仏習合的記述が『根元記』では削除されていることなどによる、『根元記』が『諸神記』『根源抄』の改竄本であるとする鳥居清氏の『根元記』後発説が存在したが、斯界では西田による『根元記』先行説をもって妥当とする評価がなされてきた。

しかし、今回、改めて各書の内容を比較検討し、かつ他の関連史料(『兼見卿記』・『舜旧記』)に照らしてみたとき、実際には兼右作『諸神根源抄』(ないし『諸神根元抄』)なる書が史料上最も早く見出されること、また、『諸神記』については梵舜自筆本が天理図書館に残されていること、そして同『諸神記』及び『根元記』には、同じく天理図書館に蔵される梵舜の手になる種々の神祇書と内容を同じくする記文が多数見受けられるが、『根源抄』にはそれらがほとんど見られないこと、などが理解された。

以上により、これまで行われてきた西田による『根元記』先行説には検討の余地が残されていること、すなわち、鳥居氏による、はじめに『根源抄』を兼右が作成し、その子・梵舜が『根源抄』を増補・改訂して『諸神記』を編み、さらにそれらが改竄されて成ったものが『根元記』であるという『根元記』後発説も改めて見直されるべきであることが理解された。

これらの成果は、『根元記』が兼右の手になる吉田家の神社研究の一大成果である」と考えられてきた従来の同家の「神社研究」史研究に対して、改めてその歴史的展開の見直しを迫ることになったものと考えている。

(ロ) 同家の神社研究と『延喜式』『神名帳』研究について

『根源抄』『諸神記』『根元記』等は概ね200程度の条目からなり、その概ねが諸国の神社について記されたものであるが、その多くが、平安期の法律書である『延喜式』巻9・10にあたる、祈年祭に預かる諸国の神社を掲げたいわゆる「神名帳」に基づいて縁起や祭礼等について記されていることが理解される。

同家においては、古写本の「神名帳」が伝来していることや(現、天理図書館蔵)、南北朝時代の兼熙や兼敦が当時現存していた神社の由緒等を「神名帳」によって調べたり、また兼俱がその注釈書である『延喜式神名帳頭註』を著したりしている点などより、「神名帳」への強い関心が根付いていたことが明らかであり、兼右の『根源抄』作成はその系譜上に位置付けられるものであることが理解される。ただし、実際には同書には「神名帳」本編の記事のみな

らず、前掲の父祖による「神名帳」関連史料(兼熙や兼敦、兼俱の息・兼致の日記『日次記』の記事や『延喜式神名帳頭註』、諸社縁起書等)までもが取り入れられていることから、同書は「神名帳」への関心・研究という父祖伝来の学問的伝統をもとに、兼右自身による成果をも取り入れた「神名帳」研究の集成書として位置付けられよう。

加えて、同書には「神名帳」には所載されない多くの式外社に関する記事も多く看取される。同家は兼俱以降、諸国の神社に裁許状を発給するなどして多大な影響を与え、勢力を拡大していくこととなるが、その活動が活発化するのが兼右の代からであることは広く知られるところであり、それはまた、兼右の代にいたって諸国の様々な神社と接する機会の増加したことを物語っている。

以上より、本書は父祖伝来の「神名帳」研究をベースに据えながらも、単なる古典研究・注釈にはとどまらない、諸社との交渉において必要不可欠の、いわゆる兼右による「神社便覧」とも言えるものであったことが理解されるのである。

さらに、『兼見卿記』天正 12 (1584) 年 4 月 27 日条には、兼見がこれを「神名帳」と並べて扱っていた記事が見られることや、梵舜が同書をもとに『諸神記』を編んだと思しいことから、同書は、兼右死後、同家において極めて重視された典籍となっていたことが理解されよう。

以上の同家の「神名帳」研究と神社研究の関わりについての研究は、これまで「神名帳」及び式内社研究については近世期の研究成果が注目を集め、また、同家の古典研究においては『日本書紀』をはじめとする神代記が中心に取り上げられてきたが、それらの先行研究に対して、新たな可能性を提示するものとなったと考えている。

(以上、「吉田家における諸社の縁起等の集成について―「神名帳」研究と神社研究―」と題し、2010年12月5日開催の神道宗教学会第64回学術大会において発表。また、論文(単著)「中世後期における吉田家の神社研究と『延喜式』「神名帳」―梵舜自筆『諸神記』を通路として―」を、『中世神話と神祇・神道世界』(単行本、伊藤聡編、竹林舎刊、2011年4月1日発行、464-494p)に公表)

以上、本研究における収集資料の調査・分析の過程で、吉田家の神社研究はすでに南北朝時代にはその萌芽がみられ、中世後期の吉田兼俱や兼右などの当主はそれら父祖の学問を継承・発展させてきたことが改めて理解された。また、前述の通り、それら同家の神社研究という学問的伝統の根底には「神名

帳」という古典に対する関心及び研究活動が存在することが確認された。

ただし、それらは単なる古典研究という範疇にとどまるものではなく、同家が神祇道家として諸国の神社への影響を強くしていく中で必要不可欠の営みであり、すなわち「神名帳」とそれらに基づいた神社研究が、神祇道家としての同家の確立を支えた重要な拠り所の一つであったことが理解された。

また、研究遂行上得られた今ひとつの重要な知見として、天理図書館所蔵の兼右や梵舜らの神祇書の多くに対し、18世紀に同家当主を務めた兼雄(良延)の書写によるもの、また一見を加えて奥を記したものが多数見られたことが挙げられる。兼雄は、近世期における家学の発展的継承に尽力した人物として知られるが、今後、同家及び同神道の展開を研究する上では、単に中世～近世初頭あるいはそれ以前の時代に視点を据えるのみではなく、こうした後代の人物たち、就中、父祖の学問に多大な関心を寄せていた兼雄が、いかに、その礎を築いてきた兼右や梵舜及びその時代というものを見ていたか、という視点も必要となるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計2件)

- (1) 新井大祐、「吉田家における諸社の縁起等の集成について―「神名帳」研究と神社研究―」、神道宗教学会、2010年12月5日、國學院大學(東京都)
- (2) 新井大祐、「吉田家と神社縁起に関する一考察―天理大学附属天理図書館吉田文庫所蔵の神社縁起関係資料を中心に―」、2009年12月6日、國學院大學(東京都)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新井 大祐 (ARAI DAISUKE)
國學院大學・研究開発推進機構・助教
研究者番号：00445462

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：